パリが黒かった頃

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学文芸研究会 公開日: 2010-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高田, 勇 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/7458

パリが黒かった頃

高田　勇

昔のパリ大学での勉強の思い出という編集者の依頼でペンを取ったが、今や死語になってきた「留学生」の思い出が私にはぴったりである。このきっかけになったのが「フランス政府招聘給費留学生」に選ばれたということが大きい。この言葉は Boursier du gouvernement français を翻訳したものであろうが、原語は「フランス政府給費生」というだけで、「留学生」という語は見当らない。

留　学

そもそもヨーロッパには日本語のように「留学」という熟した語はない。例えば私たちが「フランスに留学する」と言っても、フランス語ではただ「フランスへ勉強に行く」Aller étudier en France とか、Aller faire ses études en France とか言うだけである。したがって一般に「留学する」は Aller étudier à l'étranger（外国へ研究に行く）とか Faire ses études à l'étranger（外国で研究する）となるだけである。因みにイタリア語でも同じことで Andare a studiare all'estero、英語でも Study abroad, Go abroad to study ときわめてそっけない。

したがって「留学生」という語を辞書で調べても、「外国人留学生」は単に Etudiant(e) étranger(e) であり、「海外日本人留学生」は Etudiant(e) japonais(e) (séjournant) à l'étranger であり「在日留学生」は

Etudiant(e) étranger(e) au Japon になるにすぎない。イタリア語でも Studiente(tessa) straniero(a) in Giappone であり、英語でも Student studying in Japan にすぎない。日本語のように留学生に対する特別の語感はないのである。

日本では「外国で」学ぶということに意義がある。わが国が島国であることと関係があるだろう。したがって、「留学」には外国人に追いつこうという日本人の思い入れが秘められている。そして「留学生」には「外国に派遣されて学術・技芸を研究・習得する学生」(『広辞苑』第四版)というように、どこかから派遣されることが重要なのである。

私が初めてフランスへ向けて発った一九六〇年には、私に限らず、同行の友人たちも特別の思いを胸に秘めていた。当時のパスポートを見ても「右の者は日本国民であって、修学のためフランス(必要諸国経由)へ赴く……」とある。先生や友人や生徒たちにまで送られて、フランス郵船の「カンボッジュ号」で横浜港大桟橋(今は昔の面影はない)を色とりどりのテープの波のなかを出国しただけになおさらであった。まだ外国へ行く者が少くて、専任講師であった私のために、文学部の先生方が奉加帳を回してくださった。当時はカンパを募るとは言わなかった。

船でフランスへ行くということは今にして思えばすばらしいことであった。今ほど感覚的に知られていなかった西欧の生活への憧れが日一日と募り、また船内での生活によって、まだ見ぬ地での生活に徐々に慣れて行くことができたからである。時計の針も一日に三〇分、たまに一時間づつ遅らせばよかったので時差ボケもなかった。

その頃、西欧はひたすら憧れの的であった。深夜にシチリア島の灯火や、ストロンボリ火山の妖精的な火が見えたときは、デッキにもたれて時の経つのも忘れたもので、船室へ帰っても興奮のあまり眠れなかった。三十二日かかって着いたマルセイユは白い岩山のような感じで驚いたものである。街並がはっきり見えるようになって初めてフランスへ着いたという実感がわいたことを思い出す。

パリ大学

当時はまだフランスには、セネガルのダカール大学を含めて、十七の国立大学——私立大学はほとんどなく

――しかなかった時代であって、パリ大学がその頂点に立っていた。私の専門に限っても、十六世紀フランス詩研究の巨星ポール・ローモニエ（一八六七～一九四九）、アンリ・シャマール（一八六七～一九五二）亡き後の時代を背負うレイモン・ルベーグ（一八九五～一九八四）――中世・ルネサンス演劇、十六世紀フランス詩――ヴェルダン＝ルイ・ソーニエ（一九一七～一九八〇）――フランス・ユマニスムの歴史――が十六世紀フランス文学を担当していた。

渡仏前からの希望が実ってルベーグ教授の指導を受けると同時に、ソーニエ教授、十六世紀フランス語研究の第一人者ジョルジュ・グーゲネム教授（一九〇〇～一九七二）の講義も聴くことができた。さらに美術史のアンドレ・シャステル教授（一九一二～一九九〇）の講義によって「フォンテーヌブロー派」に傾倒することができたのは、マニエリスムを中心に文学と芸術の関連を研究するうえではかり知れないプラスになった。

ルベーグ教授が与えてくださったテーマは「ロンサールの作品における神話」であり、そのための必読書がジャン・セズネック『神々は死なず――ルネサンス美術における異教の神々の残存』（一九四〇）であった。この本はフランスで書かれ、印刷され、イギリス（ウォーバーグ研究所）で出版され、初版のまま絶版になったうえ、三五〇部という僅少部数、それもヨーロッパを襲った世界的な不幸のために人々の目にとまらず、大半は失われてしまっていて、パリ大学図書館の特別保存書籍ということで、教授閲覧室で特別に読むことが許された。ルベーグ教授のおかげで日参して、結局は三七一頁のこの本を完全に筆写することになった。コピー機などなかったのは言うまでもない。写真にとる発想はなかったが、後年にコピーを申し入れて拒絶されたことを思えば許される筈もなかったであろう。後にこの本を翻訳し、美術出版社から出版し（一九七七）、著者のセズネック先生（一九〇五～一九八三）御夫妻と家族的なおつきあいをすることになろうとは夢にも思わなかった。

ルベーグ教授は詩人の全集のお手本との評判の高いポール・ローモニエ版『ロンサール全集』（二十巻二十五冊）をアメリカのイシドア・シルヴァー教授と二人で改訂・増補中であった。最後のまとめはルベーグ教授がやっていて、ロンサールの作品に出てくる固有名詞、詩人が利用した典拠（スーケス）の厖大なカードを、ルネ・ヴァイスマンという若い女性に作らせていた。教授は出来あがっている部

分を親切にも私に利用させてくださった。この部分は全集の第二十巻（一九七五）にあたる。

当時は日本の学会とフランスの学会との交流はなかったし、フランスにおいても現在のように「十六世紀フランス研究学会」Société Française d'Etude du Seizième Siècle をはじめとするルネサンス関係の諸学会が毎月のようにシンポジウムを開いている時代ではなかったので、研究者間の交流もままならなかった。その意味でも、研究の対象とするプレイヤード詩派研究の第一人者ルベーグ教授の指導を受けるのは夢のようであった。

パリ大学国際都市

パリ大学での勉強も、「パリ大学国際都市」（「パリ国際大学都市」とも訳されている）Cité Internationale Universitaire de Paris に住んでいなければ全く違ったものになっていたであろう。当時は創立以来の「パリ大学都市」Cité Universitaire de Paris と呼ばれていて、現在のように「国際」などという表記はなかったが、実質は「国際」以外の何ものでもなかった。「国際」がついたのは一九七〇年代のなかばと思われる。

ここでパリ大学と「大学都市」（以下このように表記）との関係について述べておこう。パリ大学は一片の法令によって大学の建物が設置され、教授が任命され、学生が募集されるという慣わしの現在の大学として発足したわけではなく、教師と学生との人的組織、両者の人的結びつきに他ならない「同業（職）組合（ウニヴェルシタス）」として、自然発生したものであって、

パリ大学は創立されたのではなく成長した[1]、

といみじくも言われている。創立年には諸説があるが、一二一五年が妥当と思われる。十三世紀末には一万五千人の学生を数えて、深刻な住宅問題を惹き起こした。わが国でも明治時代に同じような現象が生じたことは、広津和郎『巷の歴史』（一九四〇）などでもよくわかる。これを憂慮した国王や大貴族や司教が地方出身者、外国人、貧窮学生のために多くの「学寮」Collège を設けたが、学寮は最初は慈善的な、単なる宿泊所の域を出なかった。やがてそこで大学での講義の復習を行うようになり、学寮で行われる「討論」によって人々を集めるようになったが、その最たるものが、パリ大学神学部、ひいてはパ

リ大学の別名のようになった「ソルボンヌ学寮」（一二五七）である。

中世の大学には学部の他に、教師と学生が所属する「ナシオン」Nation という組織があった。これはラテン語の「ナチオ」Natio（生誕）から来た言葉で、「同じときに同じ場所で生まれた個人の集合体」を表わした。大学での講義・演習はもっぱらラテン語で行われていた。このためパリ大学を中心とする地区、つまり現在のパリ第五区と第六区を「カルチエ・ラタン」と呼ぶのは周知の事実である。

しかし、講義・演習の合間に話される俗語による区分による、出身地を同じくする教師と学生の相互扶助の組織である「ナシオン」は、パリ大学には四つあった。即ち、「フランス」、「ノルマンディー」、「ピカルディー」、「イングランド」であるが、「フランス」には中世的な意味におけるフランスの学生以外に、南仏、イタリア、イスパニアの学生が含まれ、「イングランド」には中欧と北欧の学生が含まれた。

さらに学生は学部に登録するが、それは四つあって、知識のさまざまな部門の高貴さの段階に従って順序づけられており、神学、法学（教会法および民法）、医学の三上級学部と、自由学科を教える予備的な学部であった。[2]

しかし、「ナシオン」は学部よりも本当の意味での大学の真の団体的側面に結びついていたといえる。ところが、日本にはこの「ナシオン」という制度はなかったから、辞書を引いてもこの訳語には「部会」、「出身者」、「同郷会」、「同郷団」、「民族団」、「国民団」とか苦しい訳語をあてている。

要するに「大学都市」は中世のこの「ナシオン」と「コレージュ」に代表される国際化と学際化の理想を融合したものである。現在でも、「大学都市」の規則書の第一条に、

国際的理解の精神に奉仕する知的ならびに道徳的和解事業として創立されたのであり、パリ大学の伝統に忠実にこれを維持し広めるものである。

と書かれている。第一次世界大戦の勃発を防げなかった反省の思いが、「大学都市」の創立にこめられているの

であろう。

さて、もう少し具体的に「大学都市」を見よう。これはバス＝ザルプ地方選出の代議士、元老院議員、パリ大学評議会委員で、第一次大戦後のポワンカレ内閣で文部大臣を勤めたアンドレ・オノラ（一八六八～一九五〇）によって、一九二五年にパリ第十四区の南端の約四十ヘクタールに及ぶ広大な緑地帯の中に建てられた学寮群のことである。以後、この理想に共鳴する各国の財界人が続々と援助を申しこむ。その最たる者はジョン・D・ロックフェラー（一八三九～一九三七）であって、「アメリカ館」はもとより、「大学都市」の中心の建物である「国際館」Maison Internationale も彼の寄付になるもので、その前の長さ五百メートル、幅二十メートルの大通りは、パリ市の行政上の名称として一九三七年以来「ロックフェラー並木通り（アヴニュー）」となっている。私財二億円を投じて「日本館」Maison du Japan（一九二九）を建てた快男子、薩摩治郎八（一九〇一～一九七六）の名も忘れることはできない。「日本館」は当初は「薩摩館」Fondation Satsuma と呼ばれた。因みに、フランス政府給費留学生制度による第一回日本人留学生の出発は一九三三年である。

フランス人建築家ピエール・サルドゥー設計の鉄筋七階建、個室六十五を備える「日本館」で、私は短い旅行期間を除いて、一九六〇年十月から一九六二年九月まで生活した。マルセイユから列車で初めてパリに着いた晩、「日本館」の扉をあけて中へ入ったとき迎えてくれたのは外国人であって、朝まで日本人を見かけず変な気持ちであった。それもその筈、「大学都市」では国際交流の精神から各国の館が「交換」Echange または「混交」Brassage の制度に基づき、その在館者の約半数をおたがいに交換することになっているからであり、夜のことでもあり、受け付けもアルバイトの外国人学生であった。

住人は男子のみで、洗面所つきの広い部屋にはベッド、机、用箪笥があるだけで、電話はなく――尤もその頃日本の拙宅にも電話はなかったが、それが平均的な日本人家庭だったと思う――各人の呼出しベルが廊下で聞こえると部屋を跳び出して、受話器を取ってから、一階の受け付けまで降りて行くのであった。テレヴィは館に一つしかなく、ド・ゴール大統領の演説のときなど黒山のような人だかり。ところが、一九七九～八〇年に館の大改修があって、各階に台所、各室に電話、テレヴィ・アンテナのコンセントが設備され隔世の感を覚えた。もっと

驚いたのは女子の入館が認められたことである。

入館希望者は具体的に国際交流に努める旨の誓約をしなければならなかった。因みに「国際的理解と協力」が「大学都市」創立の目的であり、フランスのというよりヨーロッパの大学であったパリ大学の伝統そのものである。創成期には学生はもとより、教師も大半は外国人であったことを忘れてはならない。彼らは眞理探究のため民族、政治を越えて国際的に協力した。だが義務感からでなくても、若者同士はすぐに親しくなるものである。

私も各国の友人が沢山できたが、最も印象深いのはメキシコの友人である。日本館とメキシコ館を相互に訪れあって、一方は奈良、京都の寺院や庭園のスライド、片方はマヤ、アステカの建築、美術のスライドを見せあった。新進のプレ・コロンビア美術研究家、建築家、ポール・ジャンドロを中心とするメキシコ人留学生と文学、芸術の他にも、人生、政治を歯に衣を着せずに熱っぽく語り合った。幸か不幸か帰宅時間などという観念はないに等しかったから、議論は徹底的に行われた。

それぞれフランスから帰国後も文通を続け、一九七七年の明大長期在外研究にあたり、バロック芸術研究もあって、主要な目的の一つである念願のメキシコに渡り、ジャンドロに十五年ぶりに再会した。もうそのときは彼はメキシコ国立自治大学教授の他、パリ第一大学他の客員教授としても活躍中であった。さらに留学時代に親しかった建築家の友人、ハイメ・オルティスがメキシコ・シティの大聖堂へ私を案内して、「おまえを歓迎してパイプ・オルガンを演奏させよう」と言って、ドイツで学んで来たというメキシコ一流のオルガン奏者を呼んで、バッハの曲を長々と演奏してくれたのには肝を潰した。彼はメキシコ政府の建築物修復の責任者になっていたのである。

ジャンドロから終日メキシコ国立人類学博物館、さらにテオティワカン遺跡で、パリ以来のプレ・コロンビア芸術の手ほどきを受けてから、モンテ・アルバン、パレンケ、ユカタン半島にも足をのばしてウシュマル、チチェン・イッア等々とマヤ文明に酔いしれた。メキシコ芸術へのジャンドロの熱烈な愛情に打たれ、彼の教育よろしきをえて、帰国後、私は彼の近著『マヤ文明』Les Mayas（一九七八）を翻訳、出版することになる（一九八一）。だが、彼はほどなく若くして世を去った。もう少し生きていて指導を続けてくれていたら、私もアマチュア学者として活躍できたのではないかと残念に思う。

中世・ルネサンスの西欧芸術に感動して、後にアンリ・

フォション『西欧の芸術』（一九三八）を共訳、出版することになったのも（一九七一）、「大学都市」で培った長谷川太郎、加藤邦男両君との友情が基になっている。今なお両君から温い指導と励ましを受けていることを思えば、この二年間がいかに重要であったかがわかる。

「大学都市」の外でも私は心ならずも日本紹介におおわらわであった。「国際生活体験会」Experiment に入会していたので、ヴェルサイユ近郊ル・シェネのフランス人家庭に一ヶ月半滞在したときに、会の責任者、ベルリッツ・スクールの校長であったニコール・ケイゼール嬢の熱心なすすめで、ヴェルサイユのロータリー・クラブ、ソロプチミスト・クラブ――このとき初めて名前を知った――、リセなどで、渡仏直後の慣れないフランス語で、日本文化、社会についてしゃべったものである。このときほど自国文化を知ることの重要性を痛感したことはない。ヴェルサイユ・ロータリー・クラブは一九六一年一月の会報（第二十三号）に、講演の――こんな上手なほめ方があるのかと思うくらいの――好意的なレジュメを掲載してくれたが、そのなかの

今宵、彼は日本の生活について語った。日本という名を聞いても《フジヤマ》（富士山（ル・モン・フジ））と《ゲイシャ》（昔の高級娼婦（クルティザーヌ）で今日では女優（アクトリス）のたぐい）しか想像しない西欧人には殆んど知られていない日本……

という一節が時代を語っている。蛇足だが、ロータリー・クラブの例会場はヴェルサイユ宮殿に隣接する「トリアノン＝パレス・ホテル」であった。アペリチフのとき、会長が「横のテーブルにジャン・ギャバンがいるよ」とささやいた。ちらっと見ると薔薇色の獅子のイメージが目に飛びこんだ。

ただこの時代は平穏とは言えなかった。フランのデノミ直後で、新（ヌーヴォー）フランとその百倍の旧（アンシアン）フランの二本建ての頃で、買い物の前に胸に手を当てて「ヌーヴォーか？　アンシアンか？」と考えねばならなかった。アルジェリア独立戦争の動乱期で、街頭には機関銃を構えた警官が立っており、プラスチック爆弾の恐れから、駅のロッカー、公衆電話ボックスは使用禁止であった。「大学都市」の目抜き通り（ロックフェラー並木通り）の「アメリカ館」が爆破された。ソルボンヌも入口で守衛に学生証を見せないとはいれない時期もあり、ＵＮＥＦ（全フランス学生連合）の活動家から、ファシズムに反

対して自由を守ろう、というビラを手渡されたものである。

パリでの二年間を無我夢中で過ごしたのはもう二度とフランスへ来ることはあるまいと思っていたからである。帰国後も、文学部では在外研究待ちの番付けがあって、あと十年待ったら、十五年待ったらとみんなが待ちわびていた。本学の在外研究費で行ったのではない私も、二年間授業を休んだのは事実なので遠慮したこともあって、専任になって二十二年後の一九七七年になって初めて長期在外研究員に選ばれて、二回目のフランスの土を踏んだ。別れて来た薄黒いパリが、アンドレ・マルローの提唱で、すっかり白くなっていたのに驚いた。

《注》

(1) チャールズ・H・ハスキンズ、野口洋二訳『十二世紀ルネサンス』創文社、一九八五、三三四頁。

(2) ジャック・ヴェルジェ、大高順雄訳『中世の大学』みすず書房、一九七九、五十頁。